

第II部 現場から望むこと

野人待望論

— 未来を切り拓く研究を —

戸田 隆夫

●神は細部に宿る

バングラデシユの英字紙で最も読者の質が高いと言われるファイナンシャル・エクスプレスの主幹であるモホン氏は大の日本虜員である。彼は、黒澤明の映画を全部見て、論評も行っている。日本で行われた国際フィルムフェスティバルにも審査員として招致された。同氏は、クロサワの最大の魅力は、ディテールにある、そしてそれが日本人と日本の社会に息づいている、と熱く語る。確かに、たとえば、「七人の侍」のワンカットごとのアングル、光彩の鋭さに強い感動を覚えた人は少なくないであろう。まさに、神は細部に宿っている。

バングラデシユにおいて、日本の協力の評判は、その宣伝下手にも拘わらず芳しい。その評判が何を根拠にしているのか、という点、とりわけ、他者による協力とどこが異なるのか、という点に関し、

共通して語られるのが、このディテールへのこだわりである。為すべきことを知っているということと、それを実際に困難な状況の中でやつてのける、ということの違いでもある。

●知識と実践の違いに関する「無知の知」

独立以来、国際協力のホットスポットであるこの国では、机上の空論しか奏でることのできない実務担当者やマネージャーの双方に恵まれた国際協力プロジェクトの残骸がいたるところに見られる。現実と一致しない水道管路網の地図や橋梁の台帳など、かたちになっっているもののみならず、海外視察つきの大規模な幹部公務員研修や、地方の名士を太らせるだけのばら撒き資金援助など、この国の人々と社会をスポイルすること以外の効果に乏しい活動が次から次へと企画され、派手に宣伝され

た後は、成果の検証もなきまま放置されている。足元の危うい援助機関ほど宣伝は上手である、と皮肉る識者も当地では少なくない。

ものごとを知っている、ということ、それを実際にやつてのける、ということの間の距離はとてつもなく大きい。これは、国際協力の現場で悪戦苦闘する実務者の常識であるはずと思ってきたが、最近では、必ずしもそうではないようだ。開発に関する学問や研究が世界的に隆盛を極める中で、これらを習得したと自認する人々が、「知っていること」と「行うこと」の間にある距離に関する「無知の知」を自覚することなく、滔滔と「あるべき」論を述べる、そんな光景が、ダツカでも毎日繰り返されている。

●「空を見ない」実務者

矛先を、一旦礼賛した日本の協力に向ける。

日本のODA体制再編に際して、「木を見て森を見ないJICAと、森を見て木を見ないJBIC」と一部に評された両組織の統合には、多くのシナジーが期待された。確かに、今は中途半端ながら、木も森も見ようと意識するようにはなった。しかし、まだじっくりこないこともある。

なぜか？ 最大の理由は、「空を見ていない」ことである。木や森を見ることが、つまり、マイクロ、マクロ双方の視点から社会の「現況」をつぶさに把握することは、もちろん必要なことではあるが、それらは、当該社会を「更に望ましい姿」に変えていくというダイナミックなビジョンや価値の創造に直結する目的意識を伴わない限り無意味である。現場において、実務者はどうしても目先の懸案の処理に追われる。木や森の変化の把握も増分的なものに留まっている。狭い視界の中で、自分に与えられた持ち場をきつちりと掃き清めることに忠実な日本の実務者の多くは、日々の営為が、最終的にいかなる価値の創造と結びついていくのか、という点を殊更に問うことなく、現場でひたすらまじめに汗を流している。当初のデザインに忠実である一方、より大きな成果を挙げ得るかもしれない僥倖、日々現場で遭遇する出会いや



行政への期待を込めつつ、住民税を納める農民（2007年タン
ガイル県カリハティ郡 撮影: JICA参加型農村開発プロジェクト
フェーズ2 (PRDP2))

協働のチャンスに対しては、ほぼ例外なく逡巡し、目を瞑って既定路線をひたすら歩もうとする。

そもそも、一見すると大海の一滴にすぎないような国際協力の個々の活動が、大きな歴史の流れにおいて如何に意義づけられるか、ということについて、眼前の具体的な問題に対処することに追われてきた実務者はさほど注意を払って来なかった。近年における国際協力の仕組みの高度化、専門化に伴い、その傾向は更に助長されつつある。

グローバル化の進む現代国際社会は、たくさんの異なるアクターが驚くほどの速さと規模で結びつき、大きな社会変革に向かって協働することを可能にしつつある

が、国際協力に関しても新たな可能性を提供している。しかし、その時代の流れを感じし、潜在的には同じ目的意識の傘の中に入るさまざまな活動を相互に結びつけ、より魅力的な社会の変化を、より速く、より持続的に、かつより多くの人々が裨益するかたちで実現しようというビジョンを語ることのできる日本の援助実務者は残念ながら非常に少ない。専門性の箱の中でひたすら緻密な作業に専念し、あるいは、コンプライアンスを全うするために、細かいルールを所与として疑わずミスを犯さないことに腐心することなどに対して、優秀な人材の時間と情熱と知的エネルギーが空費されている。

●開発論の核心に迫る野生的な知性待望

日本にいと、国際協力という修辭が体现する営みが、あたかもひとつのまとまりをもったもののように思える。途上国にいと、これが、それぞれに潜在的な魅力と課題を孕んだ個別の活動として拡大鏡で見えるように迫ってくる。その結果、一見、同じようなスタイルのさまざまな活動の有効性に関し、決定的な違いがあることを学ぶことができる。たとえば、バングラデシュにおいて、コミュニティ開発と住民のエンパワーメン

トを標榜する活動は無数にあるが、その中で、実際に持続可能なかたちで伝播普及される可能性を有しているものは残念ながらごく僅かである。幸いにも、その中に、農村において人々と末端行政を結びつけるリンクモデルや、母子保健のためのノルシンディ県における実践モデルなど、日本のODAによる活動が一部含まれている。しかし、現場においては経験的に明らかで、この「違い」について、我田引水の議論と一線を画しつつ、可視化、客観化し、多くのアクターの理解と支持を得て、その普及展開を推進していくことは容易ではない。

このようなディテールの違いという現象の背景に、より根源的な、あるいは、開発論の核心に迫る何かがありそうだと、いうことは、実務者の知性と感性でもおぼろげながら把握しつつある。しかし、そこに潜む知見を、人類社会の公共財として昇華させ活用するためには、現場で日々実務に追われている者が発揮している知力と体感力とは異なる意味でのプロフェッショナルな知性と感性が必要である。しかも、その知性と感性は、壮大な時空を超え、はるかかなたの北極星を強い視線で射抜くようなパトス、あるいは、理念を伴う社会変革への強い情熱を伴って

るものでなければならぬ。

本来であれば、ここで、開発実務と開発研究の間の予定調和的な相互補完性を強調すべきかもしれない。しかし、もし、開発研究が、開発実務と同様に、高度な、あるいは、過度な専門化の中で、大きな歴史の流れにおける全体観や新たな時代創造のビジョンを失っているとするならば、その状況からの脱却は容易ではないだろう。国際協力の真髓が宿るかもしれない実世界の葛藤とそれを表象するディテールにこだわりつつけながらも、そこから人類社会の未来創造に対するメッセージを汲み取り、形式知化することのできる野性味に富んだ知性は如何にして発現するのか？ 開発に関する「世界のクロサワ」が開発研究の営為を介在して現れるとすれば、そのために、研究諸機関、実務諸機関の建設的な競争・協働関係を含め、如何なる舞台設定が必要なのか？ それとも狭い器の中の一切の作為は無駄なのか？ 開発論の核心に迫る、より根源的な破壊と創造に挑むことを含め、開発研究者による更に野心的な、あるいは、旧弊を越えて新たな地平に挑む破天荒な取り組みに期待したい。

(とだ たかお/JICAバングラデシュ事務所長)